

第109回貴重書展

— 曾我物語とその周辺 —

期間 平成18年5月26日(金)～6月10日(土)



鶴見大学図書館

ご当地もの

古典籍集めに欠かせないものは、何でしょうか。良質大規模なコレクションの寄贈を別とすれば、潤沢な軍資金が第一です。しかし、重文国宝を自在に購入する資力に恵まれた大学は、今日絶無と言ってよいでしょう。古典籍の持つ大きな意味に関心を寄せる図書館であればどこでも、乏しい予算をやりくりして質の高い蔵書形成に苦心しているはずです。では、資金面にそれほど期待できない場合でも、なんとかよい本を集めたいとすると、次に必要となるものはなんでしょう。おそらくそれは、良否真贋・時代の新旧を見抜く眼と、機会を逃さない判断だと思います（本屋さんの協力があるともっと効果的ですが、うっかり道を誤れば業者との癒着につながりますので、個人的には古典籍商からなるべく遠ざかるようにしています）。さらにもうひとつ、蔵書の「筋」が大切だと考えます。

もともと使えるお金が少ないのですから、総花的になんでも買うことは出来かねます。したがって、ほとんど無限と言える国文学の古書の広がりの中から、何を主題として選択し見応えのある体系を作り上げてゆくのか、見通しを立てねばなりません。これを間違えると、まとまりを欠く「筋」の悪いコレクションとなってしまいます。

本学図書館の場合、洋書・仏典はしばらく措き国文学の領域で言えば、作品それ自体の意義から『源氏物語』と古注釈類、文学史の柱である勅撰集資料などを「筋」として収集していますが、もうひとつ、「ご当地もの」へ配慮もあります。横浜ゆかりの出版・地誌それに『曾我物語』です。大学院文学研究科博士第一号の山西明氏が『曾我物語』の研究で学位論文を出され、集書に拍車がかかりました。と申しましても、懐具合の寂しい当節、なかなか思うように本は増やせません。あれこれかき集めてお目に掛けるのが、今回の催しです。例によって本学教員からの資料供出により体裁を整えたところもあります。一種悪あがき風の展示ではありますが、是非ごゆっくりお楽しみください。

東井下浣 図書館長 高田信敬

（解題は、高田のほか、石澤一志・中川博夫・堀川貴司が担当した。体裁の不統一が残った点、乞御海容）

展示書目

*は個人蔵

I 曾我の写本

- | | | | | |
|----|------|-----------|---------|--------|
| 1. | 曾我物語 | (伝飯尾常房筆) | 江戸時代前期写 | 列帖装12冊 |
| 2. | 曾我物語 | (和学講談所旧蔵) | 江戸時代初期写 | 列帖装11冊 |
| 3. | 曾我物語 | | 室町時代末期写 | 残欠袋綴4冊 |

(参考)木版口絵 武内桂舟「虎御前」(『文藝倶楽部』20巻1号)

II 曾我の版本

- | | | | | |
|----|------|---------|---------|-------|
| 4. | 曾我物語 | 零本 古活字版 | | 袋綴1冊* |
| 5. | 曾我物語 | (亀井孝旧蔵) | 寛永4年刊 | 袋綴12冊 |
| 6. | 曾我物語 | (亀井孝旧蔵) | 正保3年刊 | 袋綴12冊 |
| 7. | 曾我物語 | | 貞享4年松会刊 | 袋綴12冊 |

III その他軍記の古活字版

- | | | | | | |
|-----|-----|-------------|------|--------|--------|
| 8. | 太平記 | 零本(卷二九・三十合) | 古活字版 | 元和頃刊 | 袋綴 |
| 9. | 義経記 | 零本 古活字丹緑本 | | 元和寛永中刊 | 袋綴1冊 |
| 10. | 天正記 | 古活字版 | | 慶長元和中刊 | 残欠袋綴5冊 |

IV 中世の史料

- | | | | | | |
|-------|--------------------|------------------|---------|---------|----------|
| 11. | 御成敗式目 | | 鎌倉時代末期写 | | 袋綴1冊 |
| 12. | 東鑑(伏見版) | 古活字版 | | 慶長10年刊 | 袋綴10冊 |
| (参考1) | 吾妻鏡 | | [江戸前期]写 | | 残欠袋綴18冊* |
| (参考2) | 東鑑 | 古活字版 | | 元和・寛永中刊 | 袋綴1冊* |
| (参考3) | 吾妻鏡 | 零本(目録、巻一) | | 寛永3年刊 | 袋綴1冊* |
| 13. | 明月記(断簡) | [藤原定家自筆 鎌倉時代前期写] | | | 3軸 |
| 14. | 後光厳天皇宸記(光厳院崩後諒闇終記) | 烏丸家旧蔵 | 享保頃写 | | 袋綴1冊* |

1 曾我物語（伝飯尾常房筆）江戸時代前期写 列帖装12冊

原装紺地金泥下絵表紙を付す。縦24.2糎、横18.1糎、左端に押八双あり。外題、表紙左肩に朱色地金泥草花文様下絵題簽を押す。「曾我物語卷第一（～十二）」と墨書（本文とは別筆）。見返し、七宝・丁子等の模様を空押しした金箔料紙をあしらう。内題、「曾我物語卷第一（～十二）」。料紙は、斐紙。毎半葉10行、字面高さ、約19.5糎。1行は19字内外、全巻を一筆で書写する。黒漆蒔絵（雁に網代）の箱に収められる。同箱の表面上部に、「飯尾常房筆／曾我物語 十二冊」とあり、また箱蓋裏中央に貼付される鑑定極めにも「曾我物語 十二冊／飯尾常房書／室町家書吏／長禄三九月薨ス／了佐極札」とあるが、掲出本はその筆跡・紙質・装訂などから判断して、江戸時代前期の書写と判断され、飯尾常房（細川成之被官、鳥飼流の書家としても知られる。文明7年〈1475〉没、17年〈1485〉とも。極めの長禄三は誤り）を書写者に比定することはできない。なお本文を精査するに至っていないが、巻九以降の目次標目の立て方は、流布本のそれに一致する。

2 曾我物語（和学講談所旧蔵）江戸時代初期写 列帖装11冊

紺地金泥雲流水に紅葉下絵描いた紙表紙を付す。大きさは、縦24.2糎、横17.9糎。1・3冊目は前表紙を、五・六・九・十は、後表紙をそれぞれ欠くが、残っているものには、表紙左端に押八双が見られ、原装か。元々の題簽は痕跡を留めるのみで全て失われ、外題は全て朱墨により補われる（「曾我ものかたり 卷第一（三～十二）」）。見返しには、金揉泊を密に蒔いた装飾料紙をあしらう。本文料紙は斐楮交漉。毎半葉11行1行字数は20字内外。和歌1首2行書きにする。字高は約20.0糎。各巻首に「和学講談所」印が捺され、その旧蔵にかかることが分かる。全巻は、三筆ほどで書写されているか。本文を精査し得ていないが、目録表題は、流布本のそれと一致する。桐箱が附属するがそれも虫損が見られ、本体も疲弊が目立つほか、残念なことに、巻二の1冊を欠く。しかしながら、本文の筆跡と残る表紙から判断するに、江戸時代初期をそう大きく下らない頃の書写であろう。

3 曾我物語 零本 室町時代末期写 残欠袋綴4冊

改装藍色地卍繫蓮華唐草文艶出表し表紙、縦27.0、横19.9糎。五つ目綴。料紙は斐楮交漉。毎半葉10行20字内外（巻一・七）、11行25字以内（巻五・八）、12行25字内外（巻九）。字高約23.0糎。漢字をごくわずかに交える平仮名書き、二筆あり、それぞれ同筆の訂正書き入れを持つ。全12巻のうち、巻一・五・七・八・九のみの零本で、巻五と巻九は合綴されているため、計4冊。外題後補題簽左肩「曾吾物語一（五、八）」「曾我物語 七」、内題は目録題「曾我物語卷第一」（～五・七・八・九）。巻五はじめの目録半丁分は後人による補筆で、その最初に「亨岳寿貞大姉御筆」とある。それ以降の冒頭と同巻後半および巻九全体が一筆、残りが一筆であろう。後者は特に闊達に自在な筆遣いで、安土桃山頃の雰囲気をよく伝える。漢語を含めてほとんどが仮名表記であること、筆者の一人が女性であるとの識語があることなど、享受史の面からも興味深い。本文は流布本系統に近いと見られるが、巻八目録には「（一二六）祐経をいんとせし事」の表題が見られない。

(参考) 木版口絵 武内桂舟「虎御前」(『文藝倶楽部』20巻1号)

尾崎紅葉・巖谷小波と組んで多くの小説挿絵を描いた武内桂舟(1861~1943)の木版口絵。背後の幕に見える庵木瓜は伊東家の紋であり、曾我十郎祐成の愛人虎御前が伊東祐経の陣をうかがう趣向で描かれたものか。桂舟は硯友社の創作活動に欠かせない画家で、硯友社内部のもめごとの調停役でもあったと伝えられる。

4 曾我物語 零本 古活字版 袋綴1冊

古い丹表紙(縦27.3、横19.7糎)だが、改装。表紙左脇に「曾我物語／十一」と打ち付け書きする。見返し、本文共紙。墨付き22丁、前遊紙1丁。每半葉12行22字程度(印刷面縦23.4、横16.8糎)、柱刻ナシ。寛永年中、おそらくはその早いころに出版されたものであろう。12行大型古活字の類版としては静嘉堂文庫が知られており、掲出本とは活字の組み方が異なる。つまり異植字版であり、他に同一版種の伝存を聞かない。

後見返しに「此本拾貳卷宝曆之火難(以下、意味とり難し)」の墨書識語あり、焼け残りの1冊か。

5 曾我物語(亀井孝旧蔵)寛永四年刊 袋綴12冊

丹色地卍繫艶出表紙(縦27.4、横18.5糎)を付す。外題は刷題簽(匡郭なし)「曾我物語 一(～十二)」を表紙左肩に貼付。料紙は楮紙。匡郭なし、每半葉12行、字高約22.0糎に刷る。内題は「曾我物語卷第一目録」(目録)「曾我物語卷第一」(巻首)。柱は「曾我卷一 一(～)」と巻数と丁付けのみを記す。刊記「于時寛永四(丁卯)年/六月中旬/洛陽三条寺町誓願寺前/安田十兵衛尉 開板」(12冊目巻末)とある。1冊目巻頭に「阿部/蔵書」の小陽刻方印を捺す。また、12冊目後見返しに「曾我物語本邦雜史之尤品也斯書/板紙精美所謂丹幟紙本之尤品也/蓋出版之時期屬於寛永年度之/初期可謂斯文興隆之魁也阿部君/寶愛珍惜之可也/明治三十八年一月十一日/蘇峰逸人警読後記之」という、徳富蘇峰の識語が記されている。なお、附属品等は見られないが、国語学者・亀井孝(1912-1995)の旧蔵にかかるもの。

6 曾我物語(亀井孝旧蔵)正保三年刊 袋綴12冊

朱地紗綾繫地草花艶出表紙(縦27.7、横18.5糎)を付す。見返しは本文共紙。外題は刷題簽(匡郭なし)「曾我物語 一(～十二)」を表紙左肩に貼付するも、5・9・12冊目を除いて、ほとんどが摩滅・欠損し、わずかに痕跡を留めるのみ。料紙は楮紙。匡郭は四周単辺、縦21.3、横15.9糎。每半葉12行で刷る。内題は「曾我物語卷第一目録」(目録)「曾我物語卷第一」(巻首)。柱は「曾我卷一 一(～)」と巻数と丁付けのみ。刊記は入れ木で「正保三年正月吉祥日/誓願寺前安田十兵衛尉 開板」(12冊目巻末)とある。1冊目見返しに「高田焼人州忠主」、12冊目後見返しに「河室久左衛門之也」の書き入れがある。印記「森々田畔耕/稼穡曆世群/書蔵丸山家」を持つが、使用者未詳。附属品等はないが、国語学者・亀井孝(1912-1995)の旧蔵にかかるもの。

7 曾我物語 貞享4年(1687)松会刊 袋綴12冊

縹色地に雷文・卷龍を墨刷した紙表紙は原装と思われ、若干の破損があるものの珍重すべき作例。表紙左肩に原題簽(縦17.5、横3.9糎)を押し、子持杵(縦16.9、横3.1糎)中に「曾我物語 一(～十二)」と刷る。各冊巻頭に目録1丁、本文と通し丁数。版心「曾我 卷ノ一(～十二) (丁数)」。本文は4周単辺(縦21.6、横16.6糎)毎半葉16行、ただし各冊巻頭のみ内題を大字に刻するため15行。虫損は補修済み、比較的早い印行らしく摺刷佳良。刊記「貞享四丁卯三月日/松会新板」。

各冊に菱川師宣風の絵あり。第1冊の場合を示せば、絵10場面の内4面連続1図、見開き2面連続7図、1面のみは2図。本文・挿絵とも寛文3年版を継承。上方優勢の近世前期出版界にあって、江戸を代表する書肆「松会」(松会堂)刊行の佳品である。なお松会版については、柏崎順子『松会版書目』(『書誌学月報』平14.10)が有益。

8 太平記〔元和頃〕刊 古活字版 零本一冊(卷二九・三十合) 袋綴

香染改装表紙、縦27.9×横19.9糎。内題「太平記第三十」、外題なし。見返し、後補素紙。本文料紙、楮紙。四周単辺、23.3×17.3糎。無界。1面12行、1行23字内外、漢字片仮名交じり。版心、上下小黒口・双花口魚尾、「太平記(巻次) (丁数)」。1丁オに「春翠文庫」(佐藤仁之助か)の方形朱印(二・九×二・九糎)を捺す。川瀬一馬『増補古活字版之研究』(昭42.12)が言う「元和寛永中刊」本。陽明文庫・慶應義塾図書館に同版あり。該本は、卷二十九の目録と本文一～三丁、卷三十の、19丁～23丁を欠く。

9 義経記 零本 古活字丹緑本 元和寛永中刊 袋綴1冊

卷2のみ存。後補の藍無地紙表紙(縦28.0、横19.8糎)。左肩に楮素紙題簽(縦19.2、横3.6糎)を推すが、外題記入なし。内題、首尾ともに「義経記卷第二」。毎半葉12行23字程度(印刷面縦23.3、横15.5糎)。全45丁、遊紙なし。かなりの湿損をうけており、総裏打ち補修済み。川瀬一馬『増補古活字版之研究』の第二種本イに相当し、四周単辺(縦19.5、横14.7糎)で囲んだ挿絵8面を持つ。元和寛永(1615～1644)中刊。素朴な図柄に朱・緑等の彩色を施した所謂「丹緑本」で、損傷があるものの、十分に時代の趣を味わえる。

10 天正記 古活字版 慶長元和刊 残欠袋綴5冊

古い栗皮色無地紙表紙(縦27.5、横19.5糎)は相当の痛みがあつて、原装か否か不明。表紙左肩に「一(四・六～八)」の巻標示。毎半葉11行20字程度(印刷面縦21.0、横15.8糎)、柱刻ナシ。各冊巻頭に目録1丁を置き、本文は濁点付刻活字を用いる。漢字に大振り遒勁な活字が混じり、版面に慶長期の雰囲気を残す。

武田氏滅亡より慶長元年に至る豊臣秀吉の伝記で、太田牛一『太閤軍記』と大村由己

『天正記』とを合わせ、仮名交じり文に改めて出版したもの。かなり人気のあった書物らしく、慶長末～元和初期の11行本を初出とし、寛永中刊まで4種刊行。掲出本は最も早い慶長末～元和初期刊である。前9冊のうち2・3・5・9の4冊を欠くが、揃い本はごく少ない。

1 1 御成敗式目 鎌倉時代末期写 袋綴1冊

改装栗皮表紙、縦20.4、横16.7糎。料紙楮紙。墨付66丁、遊紙なし。毎半葉5行11字内外、白界あり、界高16.9、界幅3.0糎。ただし、1丁おき、もしくは1丁の表裏交代で出現する。各丁原料紙は半葉ごとにばらばらで、全面裏打ち紙によって袋状にし、かつ裏打ち紙のみの部分を綴じ代に宛てている。これらを総合するに、原装時には粘葉装両面書写で、糊付き部分が痛んだため、各丁を表と裏に剥いで袋綴に改装したものであろう。巻首題「御成敗式目」。内容は式目日本体51条（末尾起請文を欠く）に加えて、追加法のうち文暦2年閏6月28日条（『中世法制史料集』第1巻所収追加法の番号で73）、さらに「追加」と題して寛喜3年8月5日条以下16条（35・42・53・21・34・54・93・94・96・98・97・121・139・143～5）を収める。なお、式目第25条末に追加第15条の摘略を付加し、追加第8条の途中に仁治元年（1240＝本書成立の上限）11月23日条（152）を挿入する。なお最終丁裏1行目に「貞永□年□□□」とあるのは、本体末尾の年記を改装の際にここへ移動させたものか。世尊寺流を思わせる流麗な字体、古態をとどめる返り点や送り仮名から、鎌倉末期、遅くとも南北朝はじめ頃の書写と見られ、式目本文も同時代の写本と遜色ない正確さを持つ。また「追加」16条の配列は近衛家本追加ほかいくつもの伝本の冒頭と一致し、かつ条数は最も少ない（ただし本書は改装を経ているので後欠の可能性は考慮しなければならない）ことも、本書の由緒正しさを示すものであろう。今後の研究が待たれる。

1 2 東鑑(伏見版、不全) 古活字版 慶長10年(1615)刊 袋綴10冊

19巻10冊存。第1冊（巻2）・2冊（巻4）・第3冊（巻5）は原装の薄茶色無地紙表紙（縦27.9、横20.8糎）、第3冊以下の表紙は後補。元来1巻1冊仕立てであったが、改装にあたって複数巻を合冊。原装の冊には、子持ち枠（縦17.6、横3.3糎）中に「東鑑 二」等と刷った原題簽が残る。四周双辺（縦22.8、横17.5糎）有界、毎半葉12行20字、版心は黒口花魚尾に書名「東鑑」と巻序・丁数。家康の愛読書であった『東鑑』は、小田原北条氏伝来の古写本を基とし富春堂五十川了庵によって慶長10年8月完成。

古活字版の尤品として知られる伏見版は、徳川家康（1542～1616）が閑室元信（1548～1612）に命じ、伏見円光寺で出版させたもの。同時期の五十川了庵刊行『東鑑』もまた伏見版の内に数えられる。当時の医学書にしばしば見られるやや小振りの活字を用い、漢字に交えられた仮名は最も早い平仮名活字の例である。

（参考1）吾妻鏡 〔江戸前期〕写 残欠袋綴18冊

紺色表紙、縦28.9×横21.3糎。内題（尾題）、「吾妻鏡第二（～二十）」。

外題なし。本文料紙、楮紙。四周単辺枠、23. 1×18. 3糎。界線幅2. 0糎、9行。朱の人名・地名符を引く。国史大系本と比して、部分に異同が散見する。巻二～巻二十残存。

(参考2) 東鑑 古活字版 元和・寛永中刊 袋綴1冊

墨色地に紗綾形・牡丹唐草を艶刷りした紙表紙(縦26. 6、横19. 8糎)は相当の古表紙だが、改装後表紙であろう。左肩に後補題簽(縦18. 5、横3. 8糎)を押し、「東鑑 三十四」と墨書。見返しは本文料紙より簾目の強い楮紙。四周双辺(縦22. 2、横17. 1糎)中に毎半葉12行22字印刷、数種の活字を用い、版心は黒口花魚尾に書名「東鑑」と巻序・丁数。内題「新刊吾妻鏡卷第十三」。巻首に「春翠文庫」(佐藤仁之助)の朱陽刻印あり。

『東鑑』は、伏見版(12)以降12行20字の形式を踏襲しているが、掲出本は12行22字となっており、川瀬一馬『増補古活字版之研究』にも著録されていない版種である。版式から見て元和末寛永初年の出版であろう。敵討ちのあった建久4年5月28日条を展示する。

(参考3) 吾妻鏡 [寛永三年]刊。零本1冊(目録、巻一) 袋綴

丹表紙、縦29. 0×横20. 9糎。本文料紙、楮紙。四周双辺、22. 2×17. 3糎。無界。毎半葉12行、1行20字、注小字双行。訓点・振り仮名を付す。版心、上下小黒口・双花口魚尾、「東鑑(巻次) (丁数)」。『振り仮名つき吾妻鏡 寛永版影印』(昭51・5、汲古書院)の阿部隆一「解題」が言う「早印丹表紙本」、即ち同影印版の底本である慶應義塾斯道文庫蔵本(25冊本)と同版であり、寛永3年刊(整版)本の一本である。同本は、「古活字版を底本として整版を以て寛永三年に上梓された」もので、伏見版と行格や首目及び首尾題の体式を同じくして承兌の跋は伏見版の覆刻である。該版は、厚手楮紙の「初印丹表紙献上本」(1巻1冊本)の次に位置する初期の印本で、題簽は初印の覆刻である(同解題参照)。

曾我十郎祐成妻大磯遊女
其咎之間被放遣畢又有五郎
虎號

13 明月記(断簡) [藤原定家自筆 鎌倉時代前期写] 3軸

本学図書館には、『明月記』の定家自筆断簡三葉(軸装三幅)が現蔵されている。それらを該当する年紀によって示せば、

イ 正治元年(1199) 7月22日条の一部

ロ 建保元年(1213) 5月22日条の一部

ハ 嘉禄元年(1225) 8月23日条の一部

となる。

イ

軸装1幅。寸法、縦31. 3×横6. 6糎。料紙、楮素紙、裏打ちあり。ごく微量の金粉や雲母が付着、元手鑑中に押されていた痕跡か。太田晶二郎氏旧蔵。

(釈文。読点は私意。以下同様)

廿二日

天晴

巳時許参大臣殿<大臣殿神宮文書之請取給事>、仰云、今日可渡神宮文書、仍沐浴

之後欲解除者、未時許晴光奉仕御祓、予陪膳、
殿下御衣冠、於庭上御祓了、有御拜、為請取彼文書

定家38歳の正治元年(1199)7月22日条の前半部分。「大臣殿」「殿下」は藤原良経で、いわゆる建久の政変後に内大臣良経は籠居し、前年の建久9年(1198)には左大将の任も止められていたが、勅勘を解かれてこの年6月22日の任大

臣節会で左大臣に転じた。前後に定家が頻繁に良経邸を訪れている一連の記事の一つ。「晴光」は、陰陽道の安倍氏時晴の男で、陰陽博士を経て陰陽権助に任じて、密奏も務め、正四下主税助にいたっている。

口

軸装1幅。寸法、縦27.7×横14.5糎。料紙、楮素紙、裏打ちあり。酒井宇吉氏旧蔵。

(积文)

後雨止、
今夜行幸本宮<本宮>、少将可供奉、
中宮行啓、予献出車、
明日最勝講始、上皇御水無瀬殿云々、女房可参只八<条宮為事>、

馬長事有列<不>、御点譴責云々、雖有水火責
力口及、国通、雅経、範茂、清経、資頼云々、為家在
此列、未知其由、誰人聳君乎、入陶朱之撰、
後聞行幸供奉人、博陸参給、
左右大将、大納言通光、師経、中納言定通、忠信、光親、
有雅、参議頼平、公氏、親定、通方、

定家52歳の建保元年(1213)5月24日条の首尾を欠いた中間部分。この夜、順徳天皇と中宮立子が、各々高陽院と中御門殿より、「本宮」即ち閑院内裏に還る。「少将」は息男為家の現任官。翌日は、最勝講始で、「上皇」後鳥羽院は水無殿に御幸という(百鍊抄・仲資王記)。「馬長」以下は、翌六月十四日の祇園御霊会の神幸の馬長の列の問題についての一文中、為家が道理なくその中に入っていることを「誰人聳君乎」と揶揄し、「入陶朱之撰」(1)と批判する。「供奉人」中の「博陸」は、関白家実、「左右大将」は、道家と公房。

なお、右下端の「後雨止」は、前文の末尾部分で、本来「今夜」以下の行の前行の下端に位置して居るべきが、現状ではほぼ「今夜」以下の行の下方にある。墨痕も、他に比して別筆とも言うべく、後人の、恐らくは本様切断の折の補筆かとも疑われる。また、「此列」以下の後半部分についても、表裏を割いた折の破損で墨面が薄滅して部分的に墨を足したかとも思われ、特に「入陶朱之撰」の部分は墨色を異にしている。

右により、国書刊行会本の本文は次のように補正し得る。「中宮行啓」→「中宮<本宮>行啓」、「女房所参」→「女房可参」、「馬長事有制」→「馬長事有列」、「範

康」→「康茂」

注

(1) 「陶朱」は、越王勾践を助けて会稽の恥辱を雪いだ范蠡が、江湖に船出して斉に行き鴟夷子と変名し、さらに陶に行き陶朱公として産業や交易で巨財を成したという(古注蒙求「范蠡泛湖」)、保身・蓄財の故事の、その「陶朱」を指す。

ハ

軸装1幅。寸法、縦23.8×横3.7糎。料紙、上二本下一本の横罫を引く具注暦様の楮紙、裏打ちあり。

(釈文)

廿三日 朝天間陰、
遅明帰廬、洗髪始精進、覚法眼来臨、依忌月不<逢>、

尾上陽介『明月記』原本及び原本断簡一覽稿(『明月記研究』7)によれば、嘉禄元年8月23日の一文。早朝に帰宅して洗髪して精進を始めたところに、覚法眼が来訪したが、何人かの忌月で会わなかった、という。

「覚法眼」は、御室光台院道助法親王に仕えた仁和寺の覚寛のこと。『明月記』には建暦から嘉禎まで、覚寛がしばしば定家邸を訪問し、定家も御室に参じて関し、相談していることが見える。

14. 後光厳天皇宸記(光厳院崩後諒闇終記) 烏丸家旧蔵

享保頃写 袋綴

布目地渋紙表紙(縦28.6、横19.7糎)中央に打付書外題「後光厳院御記^{貞治四年}_{諒闇終}」、この外題は本文と同筆の如くであり、書写者烏丸光榮(1686~1784)の手であろう。1丁オ・5丁オに「烏丸家蔵」の朱文方形印。本文每半葉11行19字程度、朱の書き入れは別筆か。墨付き5丁、遊紙なし。虫損補修済みなれど、その技拙劣。

最終丁ウラに奥書「右御記尤深秘蔵之書也／乞借准槐家本臨写之／校訂畢／参議左大丞藤原光榮」。「参議左大丞」(左大弁)の位署書から、享保4年(1719)12月5日以降、同7年4月14日までの書写と判明する。

後光厳天皇(1338~1374)の宸記には、掲出本のほかに、応安3・4年記が知られる。掲出本を『貞治四年諒闇終記』(続群書)と比較すると、若干の字句の異同・割注の本行化などの差がある。素性のよい校訂資料と言えよう。